

お 推し、燃ゆ も 宇佐見りん

推しが燃えた。ファンを殴ったらしい。まだ詳細は何ひとつわかっていない。何ひとつわかっていないにもかかわらず、それは一晩で急速に炎上した。寝苦しい日だった。虫の知らせというのか、自然に目が覚め、時間を確認しようと携帯をひらくとSNSがやけに騒がしい。寝ぼけた目が「真幸くんファン殴ったって」という文字をとらえ、一瞬、現実味を失った。腿の裏に寝汗をかいていた。ネットニュースを確認したあとは、タオルケットのめくれ落ちたベッドの上で居竦まるよりほかなく、拡散され燃え広がるのを眺めながら推しの現状だけが気がかりだった。

無事？ メッセージの通知が、待ち受けにした推しの目許を犯罪者のように覆った。成美からだった。翌日、電車の乗車口に駆け込んできた成美は開口一番「無事？」と言った。成美はリアルでもデジタルでも同じようにしゃべる。ふたつの大きな目と困り眉に豊かに悲しみをたたえる成美の顔を見て、あたしはよく似た絵文字があるなと思いつつ「駄目そう」と言う。「そうか」「そうよ」制服のワイシャツのボタンを二個はずした成美が隣に腰を下ろすと、柑橘系の制汗剤が冷たく匂った。きついまぶしさで見えづらくなった画面に0815、推しの誕生日を入力し、何の気なしにひらいたSNSは人の呼気にまみれている。

「かなり言われてる感じ？」んしょ、と成美も携帯を取り出す。透明なシリコンの携帯ケースに黒っぽい写真がはさまるように入っていて「チエキちゃん」と言う。「最高でしょ」、スタンプみたいな屈託のない笑顔が言った。成美はアイコンを取り換えるように都度表情を変え、明快にしゃべる。建前や作りわらいではなく、自分をできるだけ単純化させているのだと思う。「ただだけ撮ったの」「十枚」「うわ、あ、でも一万円」「て考えると、でしょ」「安いわ、安かったわ」

彼女が熱を上げているメンズ地下アイドルには、ライブ後に自分の推しとチエキ撮影のできるサービスがある。見せられた数枚のチエキには長い髪を丁寧に編み込んだ成美が写っていて、後ろから腕を回されたり推しと頬をくっつけたりしている。去年まで有名なアイドルグループを追いかけていた成美は「触れ合えない地上より触れ合える地下」

と言う。あかりも来なくて、はまるよ、認知もらえたり裏で繋がれたり、もしかしたら付き合えるかもしれないだよ。

あたしは触れ合いたいとは思わなかった。現場も行くけどどちらかと言えば有象無象のファンでありたい。拍手の一部になり歓声の一部になり、匿名の書き込みでありがとうって言いたい。

「ハグしたときにね、耳にかかった髪の毛払ってくれて、何かついてたかなって思ったら」

成美が声をひそめる。

「いい匂いする、って」

やっぱ。小さい「っ」に力を込める。成美が「でしょ。もう絶対戻れないな」とチエキを元通りにしよう。去年まで成美が追っかけていたアイドルは留学すると言って芸能界を引退した。三日間、彼女は学校を休んだ。

たしかに、と言った。電柱の影が二人の顔を通り過ぎた。はしやぎ過ぎたともいうように成美は曲げていた膝を伸ばし、桃色の膝頭に向かって急に落ち着いた声で「でも、偉いよ、あかりは。来てて偉い」と呟く。

「いま、来てて偉いって言った」

「ん」

「生きてて偉い、って聞こえた一瞬」

成美は胸の奥で咳き込むようにわらい、「それも偉い」と言った。

「推しは命にかかわるからね」

生まれてきてくれてありがとうとかチケット当たなくて死んだとか目が合ったから結婚だとか、仰々しい物言いをする人は多い。成美もあたしも例外ではないけど、調子のいいときばかり結婚とか言うのも嫌だし、病めるときも健やかなるときも推しを推す」と書き込んだ。電車が停まり、蟬の声がふくらむ。送信する。隣からいいねが飛んでくる。

リュックサックを、この前推しのライブに行ったままの状態ですべて持ってきた。学校で使えるものは感想をメモする用のルーズリーフとペンくらいだったので、古典を見せてもらい数学を借り、水着もないので水泳の授業はプール横に立った。

「尊い」「しんどい」。
 アイドルや俳優の「推し」に対して使われる言葉。推し色を求めてコンサートに行き、祭壇を回り、推しの誕生日ケーキを祝い(自分で食べる)。愛もお金も時間もすべて捧げる人は、推しが炎上したときどうなるのか。やってらんない人生、推しがいるから生きていく。そんな「推しに生きる」人を書きたいと思いました。

推しだけでなく、推しも推すこともまた、尊く、しんどいと思うのです。



宇佐見りん (うさみりん)
 1999年静岡県生まれ、神奈川県育ち。現在大学生。2019年、『かか』で第56回文藝賞を受賞、三島由紀夫賞候補となる。

『推し、燃ゆ』
 宇佐見りん



単行本 46判 / 上製 / 144ページ
 ISBN 978-4-309-02916-0 / Cコード:0093
 予価本体1,400円(税抜) 発売日:2020.09.11

河出書房新社

「お推しが炎上した。」

「推しは背骨」と言い、
 祈るように推しを推す高校生・あかり。
 ある日推しのアイドルがファンを殴り――

『推し、燃ゆ』立ち読みペーパー

イラスト ©ダイスケリチャード

「尊い」「しんどい」「無理」「語彙死んだ」を完全に言語化した、パンチライン満載、推すことは生きること小説!

〈病めるときも健やかなるときも推しを推す〉 ●7ページより

理由なんてあるはずがない。存在が好きだから、顔、踊り、歌、口調、性格、身のこなし、推しにまつわる諸々が好きになってくる。坊主憎けりゃ袈裟まで憎い、の逆だ。

その坊主を好きになれば、着ている袈裟の糸のほつれまでいとおしくなってくる。 ●29ページより

裸眼だと顔がまるで見えない遠い舞台上でも、
 登場時の空気感だけで推しだとわかる。 ●22ページより

「推しは命にかかわるからね」 ●6ページより

推しを推すことがあたしの生活の中心で絶対で、それだけは何をおいても明確だった。中心っていうか、背骨かな。 ●37ページより

雑誌掲載だけで、大量の感想があふれた!
異例! SNSで話題騒然!



ゆうさん

「推しが……尊い……ムリイ……」をこんなに詳細に書き上げる人がいるなんて! 共感するからこそ、後半がしんどい



青柳美帆子 @ao8122さん

面白かった。「推しのおかげで人生頑張ってます!🔥」という人よりは「推しのおかげでこのファックな世界をなんなんなんとかやってます🤔」みたいな人に読んでほしいし感想を聞きたいところ。



つくねさん

久しぶりこんなに夢中になって文章読んだかも
 99年生まれって見てびっくり返ったけど、SNS特有の口調とか描写のしかたがリアルでたしかに…となった



輪るいーじドラム @no_tomorrow_toUさん

推しを持つすべての人間にとっての「自分の人生とは何か?」という問いに答えた意欲作。「推し事」に懸ける主人公の熱量。対比して描かれる、現実の「自分の人生」への絶望、周囲の無理解。献身が、ふと狂気の顔を見せる瞬間。そのどれもがあまりにもリアル。100点中10000点。



巖谷 @iwystuさん

人生で一度でも生きにくさみたいなのを感じた、三次元に推しと呼ぶ人がいてその人に救われたことのあるおたくは読んでみてほしい。私はあれを地獄だと思うけど、他の人はどうですか。

他、多数!